

琉球大学学術リポジトリ

「模擬授業」で学生の授業力向上を図るための実践事例：

学生の課題解決に視点を当てた国語科の授業づくりを通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2015-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉城, きみ子, Tamaki, Kimiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33056

「模擬授業」で学生の授業力向上を図るための実践事例 ～学生の課題解決に視点を当てた国語科の授業づくりを通して～

玉城きみ子*

A Practical Case For The Development of Students Quality of Lessons by Trial Lessons

～Through the lesson-planning in Department of Japanese language
That Assigned a Viewpoint to Problem-solving of the student～

Kimiko TAMAKI*

1 はじめに

平成23年度より後学期の開設科目「模擬授業」を担当し、今期で4回目を迎えている。模擬授業の時間は、「授業とは何か」「教材研究の仕方について」「思考力・判断力・表現力の育成に向けた授業づくり」等について、筆者と学生同士が互いに学び合う貴重な場になっている。

毎年のように学生から授業づくりに関する課題が出され、模擬授業のリフレクションにおいて、授業と課題を結び付けながら課題解決にむけての話し合いが熱心に行われる。

2年次、3年次、4年次が一緒になって学び合い、授業づくりを通して共通の課題や各自の課題を解決していく様子は、学校現場の校内研究会の雰囲気と重なり、近い将来、教師になるための自覚を促す大切な場にもなっている。

このような学生の努力と成長の様子は、その都度、学生自身の「自己評価」や「模擬授業だ

より」「学習指導案・模擬授業の評価」として表すようにしている。それを通して一定の成果や課題を把握し、次時の授業づくりに生かすようにしてきた。

また、「模擬授業」の特色として次の二つのことがあげられる。一つ目は、学生が学校現場の校内研究会に参加し、授業観察のみならず授業研究会の話し合いにも参加していることである。二つ目にNARAEネットの関連で那覇市立教育研究所の指導主事を講師として招聘し、講話や模擬授業を実施していることである。

そのような中で、学生の授業づくりに関する意気込みは高まり、課題も授業の本質に迫るものが増えている。その課題の中には、公立の学校現場の教師の課題と共通するものが数多くみられる。その課題解決の糸口を「模擬授業」の中で見つけるために真摯に向き合っている学生の姿に意欲と情熱を見て取ることができる。

* 教育実践総合センター

それは、現役で公立学校教員候補者採用選考試験に合格を果たし、すぐに公立学校に本採用される学生たちが増えていることにも起因する。2年次、3年次の頃から現役合格者を具体的な目標に掲げ「学校現場に出て実践力のある教師になりたい」という強い思いで「模擬授業」の授業に取り組んでいる。

学生の授業づくりに対する真摯な姿を目の当たりにした時、学生が「共通の課題に対してどのように取組み、模擬授業を通して授業力がどう変容したのか」をきめ細かく省察し、その成果と課題を学生と共有しながら積み上げていくことの大切さを痛感している。そうすることが、学生自身のさらなる意欲や励みとなり授業力向上に繋がっていくものだと考える。

本稿では、「子ども主体の授業づくり」に向けて、学生と現場の教師の共通の課題「ヤマ場の設定の仕方」等を視野に入れた教材研究を深め、それを実際の模擬授業に繋げていく過程やリフレクションでの授業づくりの話し合いの内容を実践事例として報告する。

また、学校現場や指導主事等との関わりの中で、「大学と公立学校との連携について」見つ

め直す機会とし、学生に対して「実践力のある教師になるための適切な支援のあり方」について考究してみるものである。

2 研究の方法

研究の方法としては、次の4つの手順で進めていきたい。

- (1) 「学生の生の声」を提示し、そこから見えてきた共通課題を明らかにする。
- (2) 学生の共通の課題についての基本的な考え方の共通理解を図る。それを基に教材研究の仕方を学び合い、教材研究で深めたことを模擬授業へ繋げていくようにする。
- (3) 実際に公立学校の授業を参観したり指導案を参考にしながら学生自身が自らの課題解決に向けた指導案を作成し授業づくりを行う。(国語科を中心に授業づくりの様子を記す。)
- (4) 模擬授業のリフレクションにおいて、共通課題に焦点を当てて話し合い、学び合ったことを明らかにする。また、指導主事や公立の学校での授業観察で学んだことも生かすようにする。(実際の学生の自己評価、授業評価、模擬授業だより等を基にまとめる)

3 学生の課題把握（学生の生の声）平成26年度後学期 第1回目の講義から

受講生10名中8名の声 2名（3年次）は2回目からの参加

第1回目の模擬授業において、学生の授業づくりに対する疑問や課題を、毎年自己評価カードに書いてもらっている。今回も例年同様に学生が自分の思いを記している。学生が授業づくりに対してどのような思いや考えを持っているか、学生の自己評価カードの中からキーワードを中心に紹介していきたい。

4年次Kさん：教育実習で10回の授業を行って、手応えのある授業はひとつも無かった。授業が上手いかなかったという思いは辛いものだが、目を背けず「どうしたら上手く子どもたちの学びを深めることに繋げるか」悩み、苦しむ入り口に立っているんだという思いで前向きに教材研究や授業づくりに取り組んでいきたい。

3年次Tさん：教育実習の研究授業のリフレクションで悔し涙を流した。自分の力のなさを痛感し、もっと良い授業づくりをしたい、流れる授業でなく思考を深める授業をしたいと強く思った。そういう思いができたのも、教材と向き合い試行錯誤しながら一生懸命に取り組んだ結果だと感じている。また、子どもに寄り添うことで子どもを見る力が育ち、良い授業ができるようになるということ学んだのでそのことも大切にしていきたい。

3年次Nさん：今日の講義で先生は、学生の考えを一度も否定することなく、その意見を褒めて広げていったので、それは私にはない力、身に付けたい力なので、この模擬授業の中にも盗める手立てがたくさんあると感じた。今日学んだことは、教師には「子どもの意見を引きだし、全体に繋げていく役目がある」ということである。

3年次Aさん：授業とは何だろう、授業づくりにおいて教師がめざすことは何だろうと考える時間になった。「流れる授業」ではなく「深める授業」を行うには、一人で考える場、一人学びの時間が大切で、「で・と・に学習（一人で、みんなと、活用につなげる）」が必要だと思った。全てに共通していることは、教師の子どもを想う気持ではないかと感じた。

2年次Tさん：実際に実習を終えた先輩方の課題等を聞くことができるともためになった。「授業の難しさ」や「授業力をつけるためにどうすればよいか」等の話し合いができて、このことを意識しながら授業に取り組んで行きたいと思った。特に教材研究を深めれば授業はいくらでもよくなるし、子ども達も自ら学び、考えることのできる授業に繋がることが分かった。

2年次Mさん：実習を経験した学生から実習先での経験（悔しかった話し等）や授業をどのように良くするなど様々な話等が聞けたことは、非常に参考になった。また、自分のこれからの授業づくりに役立つだろうと思った。多くのことを吸収し、次年度の実習に備えていきたい。

2年次Kさん：授業の主体は子どもであるので、子どもをしっかり観察し理解する力をつけたいと思った。それが、授業力の向上にも繋がると考える。特に「で・と・に学習」を大切に、一人で考え、みんなと学び合い、生活に活かせる授業づくりをしていきたいと思う。

2年次Hさん：3年生の先輩の話の中に「自分では上手く流れた良い授業だと思ったが、子ども達は考えていたのか？という指摘にはっとした」というのがあって、スムーズに流れる授業と深く考える授業について考えさせられた。自己満足の授業や指導書どおりの授業にならないように、子どもが主体的に学習に取組、深く思考できる授業づくりをしていきたいと思った。

このように学生の生の声には、殆ど毎年共通しているものがある。「子ども主体の授業づくり」「子どもの思考を深める授業づくり」と言葉では簡単に言えるが、実際に教壇に立つてみるとなかなかできないということを実習後の学生は異口同音に話している。

今回、教育実習を終えた学生のレポートを整理してみると、教材研究の重要さに気づき、指導案どおりにはいかないことを痛感していることが明らかになった。

また、今後、教育実習を迎える2年次にとっては、実習を終えた学生から直接、実習先での授業づくりの反省や課題を聞くことにより、少しでもより良い授業づくりをして先輩方に近づくようにしよ

うとする真摯な態度が見られる。それは、教材研究や授業づくりに対する意欲に繋がっている。

これまで記したように学生の共通の課題は「スムーズに流れる授業ではなく子どもが深く考える授業づくり」「子ども主体ので・と・に学習をしたい」となっている。

子どもの「思考」を深め、学び合いの授業づくりをするためには、45分の中に一人でしっかり考える「一人学びの場」と「みんなで学び合い」をしていくための「ヤマ場」の設定が重要になる。この「ヤマ場」の設定については、学生だけの課題ではなく、学校現場の教師の共通の課題でもある。実際の授業づくりにおいて「子どもに付けたい力は何か」「ヤマ場でどんな発

問を行うか」が授業のカギを握ることになる。

今回は、学生の共通課題を中心に45分の授業に「ヤマ場」の設定を試みた模擬授業で互いに学びあうことになった。

4 授業づくりの基になる考え方

(1) 「子ども主体の授業づくり」の「で・と・に」学習について

「子ども主体の授業づくり」のための基礎基本として「で・と・に学習」と「授業のヤマ場とは何か」について互いに共通理解を図った。

まず「で・と・に学習」ついてであるが、これまで何度も取り組んでいることなので簡潔に記していきたい。「で」は「一人で学ぶ」、「と」はみんなと学ぶ、「に」は生活に生かすことである。

① 一人「で」学ぶ

「一人学び」は、教師が作成した「一人学びの手引き」を基に学び方を学ぶのである。主な内容は音読や教材文の視写、書き込み等がある。「一人学び」を通して、子ども達は教材文に對峙し、疑問や課題等を持ち「もっと知りたい」を取り込んでいく時間となる。

②みんな「と」学ぶ

共通課題に対して一人一人が自分の考えを出し合ってみんなと学ぶ時間になる。

自分なりの考えを持って授業に臨むことが条件になる。同じ課題や言葉でも人それぞれ感じ方が違うことを知ったり、友人の意見に感心したりして自分の中に学びを取り込んでいく時間になる。また、他人の考えに耳を傾けたりお互いを認め合ったりする時間にもなる。この時間こそが教師にとっては「ヤマ場」を設定し、子どもに深く考えさせるための発問や手立てを用意しなければならない重要な場になる。

③生活「に」生かす

教室で学んだことを日々の生活に生かすことによって主体的に学ぶ子どもを育てる場になる。特に読みで学んだことを表現に生かすことで学ぶ喜びを実感することができる。

つまり、学習に必然性を持たせることであり、教師は、教材研究の中で「子どもが夢中になり集中できる活動」を仕組み、学びが日々の生活

を豊かにすることを実感させるようにすることが大切である。

(2) 授業の「ヤマ場」とは何か

学生に「授業のヤマ場について」質問をすると、特に「授業のヤマ場を意識したことはない」「ヤマ場をどのように設定するかよく分からない」という声が度々あがる。

また、学校現場の公開授業に出かけて授業参観しているとスムーズに流れるような授業に良く出会う。予定通り、指導案に沿った授業で参観者からは絶賛されるが、なぜか少し物足りなさを感じるのである。

よく、授業は「ドラマ」に例えられることが多い。「ドラマ」を見ていて、クライマックスの場面になると、手に汗を握ったり、目が釘付けになったりすることが度々ある。授業においても、45分のある場面で教師も子どもも参観者も集中して「ここをどう乗り越えるのか」と緊張感が漂うことがある。そこが「ヤマ場」ではないかと捉えている。

授業の「ヤマ場」こそが、その授業の善し悪しを決定する条件のひとつだと言われている。この発問で「クラス全員を授業の中に引き込むことができるか」「子どもが集中して考えることができるか」「子どもの思考をいくつ予測できるか」等を考えながら教材研究をしていく。

授業のヤマ場について『現代授業研究大事典』で調べると下記のことが記されていた。「授業のヤマ場とは、授業の目標、内容に照らしてみても、子ども達にとっても、もっとも困難な解決すべき（乗り越えるべき）課題に対して、子ども達が主体的に立ち向かい、克服していく場面と言われています。一中略一 授業の山場には【基本的な定義】が3つある。

- ① 授業の中で子どもの意欲が盛り上がり、学習活動がさかんな場面
- ② 授業の目標達成のために緊張にみちた時間で教師の揺さぶりがあり、お互いに揺れる場面
- ③ 教師があらかじめ計画していた課題に対して、子ども達が立ち向かい、解決した重要な場面。この3つの定義も念頭にいれ、教材研究を行い、指導案づくりへ繋げていきたい。

5 学生同士で学び合った「教材研究の仕方や手順」について

(1) 学生の課題「教材研究の仕方」の指導にあたって

教職をめざす学生にとって、授業づくりの大きな課題のひとつに「教材研究の仕方がよくわからない」があげられる。教育実習を終えた3,4年次の学生は、指導案の書き方や授業の進め方についてはある程度理解し自信もついてきているが、実習期間中は、指導書を頼りに指導案を書き、赤本（教師用の赤字入り教科書）を参考にしながら授業を進めてきた経緯がある。もちろん、これまでの教職系科目の中で教材研究の一定のノウハウは身につけていると思うが、まっさらな教材文を目の前にした時、何からどのように始めるのかを十分に把握できていない学生も少なくない。2年次においては、すべてが初めての経験なので、この模擬授業がスタートとなる。

今回は、模擬授業の正規の時間とは別にオフィスアワーの時間を活用して「教材研究の仕方や手順」を示し、学生と筆者が一緒になって教材研究を行い、模擬授業から授業のリフレクションまで行ってきた。次に示す「教材研究の手順」は、筆者が公立学校での教職経験やこれまでの研修等の中で、自分なりに試行錯誤しながら生み出してきたものである。

「守・破・離」という言葉があるように、教職に就いた最初の頃は、初任者研修担当教師の教材研究の手順や先行実践等を参考にしながら教材研究を進め、徐々に自己に合った教材研究の仕方を獲得していく。今回は国語科の読みの授業づくりについて、下記の「教材研究の手順」に沿って丁寧に進めることにした。

(2) 学生に示した教材研究の手順

- ① 教師の一人学びシートを基に教材研究を進める。最初は指導書や赤本なしで進める。
- ② 教師が一読して感じたことを出し合う。
- ③ この教材の特色：この教材の価値について話し合う
この教材で子どもにどんな力を付けることができるかを話し合う。
ここで教師は、何度も繰り返し読んでその特色を見つけていく。
(子どもの実態を考えながら、子どもにつけてあげたい力も明確にしておく)
- ④ 教材文の中からキーワードやキーセンテンスをさがす。
なぜ、この言葉や文が大事なか、その理由も書く
教師が読みながら感じた疑問や子どもが抱きそうな疑問や課題を書き込んでいく。
子どもが躓きそうな所や是非押さえないところ書き込みをする。
- ⑤ この教材をどのような観点で読ませるか 指導と評価の一体化をめざして、読みの観点を3点に絞る。
- ⑥ これまで教材研究したことと参考文献や指導書、赤本などと比較しながら、教材研究をさらに深める。
- ⑦ 単元を貫く言語活動を何にするか、並行読書の選定を考える。
教師は、教材文を視写することによってもう一度教材文の特徴や価値について読み深め、単元を貫く言語活動を決定する。それと同時に並行読書の選定を行う。
- ⑧ 単元を貫く言語活動のモデルを教師が書いてみる。
- ⑨ 指導計画や本時の指導案、板書計画を立てる。
- ⑩ 本時の「ヤマ場」における中心発問を考える。同時に子どもの思考の予測を行う。

(3) 学生の教材研究の足跡：書き込みや教師の一人学びシート

教材研究の手順に沿って教材研究を進める際に「教師の一人学びシート」を提示し、それを基に教材研究を深めてきた。教材研究の流れと学生の「教師の一人学びシート」や「教材文への書き込み」「教材研究での仲間との学び合い」等を記していくことにする。

手順②の教師の一読後の感想についてだが、学生は、教材文「三年とうげ」（光村図書3年下）を読み「この教材で培うことのできる力は何か」を、各自が出し合い焦点化をしていった。

殆どの学生は、「この教材文は、主人公の心情の変化が捉えやすい」という感想を述べていた。また、この教材文は朝鮮半島に伝わる民話で、民話独特の語り口には楽しいリズムがあり、物語の構成の「起・承・転・結」もはっきりしていることや、文章の「転」の部分に考えを変えるきっかけがあることにもすぐに気付くことができた。そのことを、教師自身が次のような形で捉え、まとめていくことにした。

① 物語全体の構成を捉える（普天間第二小の先生方からの学んだことを中心に）

構成	場面の展開	内 容
起	三年とうげの様子と 言い伝え	①ため息が出るほど美しい眺めである三年とうげである。 恐ろしい言い伝えのある三年とうげである。
承	三年とうげで転び、 おじいさんは病気になっ てしまう。	②主人公のおじいさんは、美しい景色に見とれて転んでしまう。言 い伝えを信じてしまい、おじいさんは病気になってしまう。
転	トリトルがおじいさ んの見舞いにくる	③おじいさんを見舞いにきたトリトルが自分の思いを話す。 トリトルは言い伝えとは全く逆に何度も転ぶことを勧める。
結	おじいさんは三年と うげで何度も転ぶ。 元気になっておじい さんは踊り出す。	④おじいさんはトリトルの言葉を信じて三年とうげで何度も転ぶ。 ⑤転べば長生きするという歌声が聞こえてくる。 ⑥すっかり元気になりおじいさんはおばあさんと幸せに暮らす。 ⑦聞こえてきた歌は誰が歌ったのかと読者へ問いかける。

物語や民話の構成が説明文の「はじめ・中・終わり」とは違って「起・承・転・結」であることを理解させるために、並行読書に準備していた教材「そらをとんだマンガース」「かえるのつなひき」「鬼ムーチー」「普天間権現の由来」でも確認していくと、子ども自身が納得できるようになる。特に、「転」の部分にこれまでの流れとは違う出来事が起こることについても指導しておく。そうすることで、子どもは、物語の続き話を書く時にそれを活用することができるようになる。

教材文全体をこのように捉えた時に、キーワードやキーセンテンスも見えてくる。教師はキーワードやキーセンテンスに線を引き、自らが書き込みをしていく。学生が教材研究の過程において実際の文章にどのように書き込みをしたのか、「教師の一人学びシート」にどのようなことを記しているのかを提示することで学生の教材研究の足跡を振り返ることにする。

④ 読みの観点を決める

手順にそって教材文を読んで書き、書いては読んでいううちに、教材を読む観点についても絞り込むことができるようになっていった。学生と確認した読みの観点を記したい。

観点1：物語全体の基本構造「起・承・転・結」を捉え、他の民話や物語にも当てはめ確認する。

観点2：中心人物を捉え、変容するきっかけをつかみ、人物の心情の変化を読み取る。

観点3：キーワードやキーセンテンスを基に読み深め、表現に繋げる。

このように学生は、教材研究の仕方を学び、それを深める過程で単元を貫く言語活動を何にするのか、そのための並行読書をどのように位置づけていけばよいのかを理解できるようになってきた。また、宜野湾市立普天間第二小の先生方の位置づけた「単元を貫く言語活動」や「並行読書」の選定の良さについても学ぶことができた。さらに単元全体の指導計画については、普天間第二小のものを参考にした。この後は、本時についての教材研究の話し合いについて触れていく。

(4) 本時の「ヤマ場」の設定

【葛藤の場面を作るための話し合い】

「教師の一人学びシート」をもとに学生同士が話し合い、教材文の特徴を押さえながら、本時の「ヤマ場」にせまる中心発問を考え、子どもの思考の予測まで行っていった。

「三年とうげ」は、「おじいさんが三年とうげで転んで病気になったが、トリトルの話を信じることによって病気が治り、おばあさんと仲良く長生きしたこと」という内容である。

ここで大切なことは「どのようなことが書かれていたか」の内容理解に留まることがないように、「この教材文で子どもにどんな力を付けることができるか」という課題意識を持って教材研究に当たることである。この教材では「主人公の心情の変化を読み取らせることが最も重要になる。主人公の心情の変化を読み取らせるために、是非気付かせたいキーワードやキーセンテンスを見つけること。なぜ、それがキーワードやキーセンテンスになるかを考える」を確認しながら教材研究を進めていった。

① キーセンテンスやキーワードを見つける

「おじいさんは、しばらく考えていましたが、うなずきました」はキーセンテンスである。

おじいさんの心情は、この文を境に変化していくのである。ここで大切なのは「しばらく考えて」で、おじいさんがしばらく何を考えたのか、読み手自身も考えていくことである。

人間が自分の考えを変えていく過程には、様々な迷いがある。その迷いを乗り越え、多様

な考えに耳を傾けていくことで、自分の考えを変えるゆとりがでてくることを、3年生なりに気づかせていくことや子どもに少し困難な課題を突きつけることで、読みが深まることを学生同士で確認していった。

そこでおじいさんの変容していく様子をしっかりと把握させると同時に、おじいさんが自分の考えを変えていく過程を、行間から読み取らせるための発問や、押さえないキーワードについて話し合った。

② 指導の手順に沿って本時の言語活動や発問を考える

○言語活動1：まず、最初は、病気になった時と病気が治った時のおじいさんの心情の変化を、文章や挿絵、歌を対比することによって明確にしていくようにする。

おじいさんの表情、しぐさ、様子が分かりやすく表現されているのでそれをしっかり押さえ、それを確認することは大切である。それを対比させ「おじいさんの気持ちが不安・心配→嬉しい・楽しいに変わった。」に気付かせる。それは第一段階である。次の段階へ子どもを連れていく必要がある。

○中心発問「おじいさんは、どうして急に考えを変えることができたのだろうか。」の発問で思考を深める。

子どもは、すぐに「トリトルさんの言うとおりにしたから」とつぶやくであろう。

ここで、子どものつぶやきを逃すことなく教師は揺さぶりの発問を用意しておくことが

重要である。

○揺さぶりの発問①「トリトルの話を知り、こんなにも表情や様子が変わり、病気で治ることができるのかな」と投げかける。子どもにしばらく思考する時間を与える。子どもの表情や呟きをもとに、さらに「ゆさぶりの発問」をかけるための準備をする。

○揺さぶり発問②「おじいさんは、トリトルさんの話を聞いてすぐに信じて実行にうつしたのかな」と問い返す。

子どもは、教材文に目を通し「おじいさんは、しばらく考えていましたが、うなずきました」このセンテンスに気づくであろう。ここを大切に扱っていききたい。

「しばらく」の中におじいさんの葛藤があり、それは、読み手の葛藤にもなるはずである。

信じていいか、信じない方がいいかと葛藤の末、生まれてきたのが自分を納得させる言葉である。

その言葉こそが、読み手がこの民話から学んだことにも繋がる。そして、それは、一般化することにも繋がっていくものである。これまで信じて疑わなかった考えを変えていくことの葛藤は、日々の生活の中でも良くあることである。発想の転換や多様な考えに気づく絶好の機会である。

一人一人の学びの違いを交流することによって、子どもは多様な考えに気づき、多くのことを学ぶことになる。そこをヤマ場に持っていく必要がある。

③ 本時の授業の主な発問に対しての子どもの思考の予測

T：「おじいさんが、今まで信じきっていた考えを変えることができたのはなぜか」

違う考えを取り入れる時には、自分を含め周りにもプラスになるかどうかを考える。

T：おじいさんは自分や周りにとってどんないいことがあると考えたのかな。

C：「病気が治るかもしれない」「おばあさんも喜ぶかも知れない」「自分のように転んで病気になった人を救えるかも知れない」「病気になってみんなに迷惑かけているからみんなも喜ぶかも知れない」が予測できる。

T：トリトルの考えに対しては

C：「なかなかおもしろい」「ユニークだ」「こんな考え方もあるんだ」「なるほど、トリトルのいう考え方も確かにあるな。今までどうして思いつかなかったのか」「トリトルのような考えを伝えればみんなが長生きできる。そうしようかな」

「昔からの言い伝えは、3年とうげで1回転んだ時のことだ。何回も転べば長生きできるとは何とおもしろいことか。愉快だ」

「トリトルの考えは、言い伝えとは全く反対のことだが、とてもおもしろい。まずは、トリトルのいうことを信じて実行してみよう。きっと病気が治るかもしれない」

「1回転んで3年、2回転んで6年、3回転んで9年、できるだけ多く転べば長生きできるかもしれないぞ。よし、実行してみよう」

T：今まで自分が信じ切っていた「言い伝え」に対しては

C：「もしかすると、迷信かもしれない」「この言い伝えには、きっと他の理由があるかもしれない」「ひとつのことにこだわりすぎていた」という反省など、自分の生活と結び付けながら切り返していくことが大事だ」

「そうだ、言い伝えばかりを信じるのではなく他の考えに耳を傾けることも大切だ」

「もし、これで病気が治るなら試してみる価値がある」

「3年しか生きられない」という言い伝えはあるが、本当にそうなのか、これは、三年峠を守るための言い伝えかもしれない」

「これまで病気を治すために医者さんにも見てもらった。でも良くなならない こうなったら思いっきり試してみることにしよう。」

「これが病気を治す切り札だ。よし、挑戦してみるぞ」

このように、教師の発問に対して、子どもの顔を思い浮かべながら思考を予測していくことの大切さを学生に指導していった。

そうすることで『現代授業研究大事典』に記されていたこと「困難な課題に立ち向かい、克服していくのは子ども達自身であるが、そのような課題を提起し子どもたちに追求過程を促

進・発展させるような組織的活動を仕組んでいくのはもっぱら教師の仕事である。授業の中で、子ども達の注意力と興味を惹きつけ最後まで持続させていく教師の働きなくして、子ども達をヤマ場＝クライマックスに突き動かしていくこ

とはできない。45分の授業で何をこそ教えるのか、どんな力を付けるのか目標・内容は、単一であり、かつ具体的、明確でなければならない。」を自分の中に取り込むことが出来ると考えた。

6 学生の模擬授業から

(1) 単元を貫く言語活動を基にした板書計画について

単元を貫く言語活動とは何か、なぜ、単元を貫く言語活動を位置づけなければならないのかを確認するために指導要領を紐解くと同時に、水戸部修治文科省調査官の資料を参考にしながら学生と共通理解を図ることにした。

① 「単元を貫く言語活動とは」

水戸部修治文科省調査官の資料には、単元を貫く言語活動を次のように説明している。

「当該単元で付けたい国語の能力を確実に子供たちに身に付けるために、子供たちの主体的な思考・判断が生かされる課題解決の過程となるよう、言語活動を、単元全体を通して一貫したものとして位置づけるものである。」

また、全ての教科の基礎となる国語科の言語活動の充実についても、水戸部修治文科省調査官は4つの原則を押さえている。

② 言語活動の充実の4つの原則

★本単元で付けたい力を見極める（実生活で生きる力、年間を通した指導事項選定）

★付けたい力にぴったりの言語活動を選定

（言語活動自体の教材研究が必要）

★言語活動を単元を貫いて位置づける（子ども自身にとっての課題解決の過程を構築）

★子どもの「大好き!」「心に響く」を重視（主体的思考・判断を活発に）

③ 「なぜ単元を貫く言語活動を位置づけるのか」

教育振興基本計画（H25, 6, 14閣議決定）には、下記のように記されている。

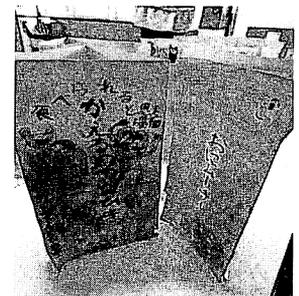
「子ども達に基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度などの確かな学力を身に付けさせるため、教育内容・方法の一層の充実を図る。その際、特に、自らの課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に考察する力などの育成を重視する。」

このような基本的なことをしっかり学生と確認してから、単元を貫く言語活動と板書との関連を図るようにした。

④ ガイドトライアングル（普天間第二小で学んだことを参考）の良さについて

普天間第二小の先生方が位置づけた「単元を貫く言語活動のガイドトライアングル」は、主人公の心情の変化が一目瞭然で分かるし、おじいさんが自分の考えを変えたきっかけや訳も明らかにしている。

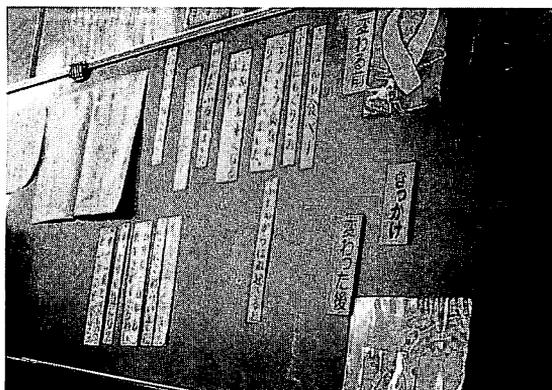
単元を貫く言語活動として適切なものであることを皆で共有することができた。子どもたちが45分で学んでいく中で、板書計画とガイドトライアングルを関連づけるようにする。そうすることで、学びの足跡がガイドトライアングルに記入され、いつのまにかそれが出来上がっていくのである。



並行読書で作成した
普天間第二小の児童の作品

⑤ 普天間第二小の板書に学びながら学生なりの板書を創っていく取組

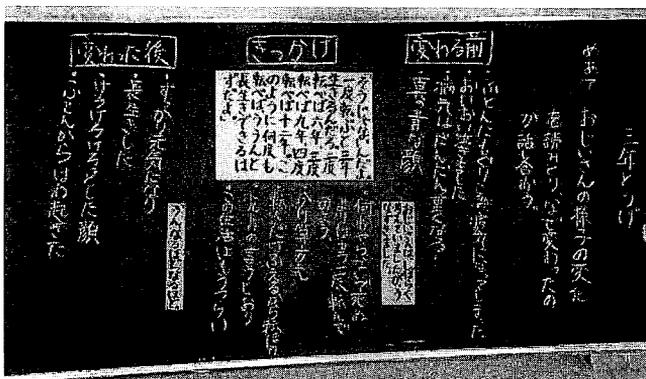
ア 普天間第二小の実践：学びの基になった板書



「良い授業に学ぼう」という合い言葉の基に普天間第二小学校の3学年の先生方の公開授業の本時の板書に学ぶことになった。普天第二小の先生方は、子ども達が既に分かっている言葉はあらかじめ短冊に準備していた。新たに児童が出した言葉は、確実に板書していた。教材文を丸ごと読むことを心がけ、なぜ、この言葉を選んだのか、その言葉からどのようなことが分かったのかを交流することに時間をかけていた。とても参考になる授業であった。

(2) 本時の模擬授業の様子から

① Sさん(学生)の発問と板書との関わり



Sさん(学生)は、普天間第二小の実践で、黒板を上下に分けて、おじいさんの心情の変化を比較していたのに対し、教材文の流れに沿って板書計画を立てて実践をすることにした。

学生同士で教材研究を深め、子どもの思考を深める手立てとして、行間を読ませるための板書を考えたのである。

「おじいさんは、しばらく考えていましたが、うなずきました」と「うん、

なるほど、なるほど。」の間におじいさんの思いを考えさせるためのスペースを作っている。子どもは教師の発問を受けて、②ガイドトライアングルに自分の考えを記入していく。子どもの思いや考えがそのスペースに板書されていった。

② 授業の「ヤマ場」の一部を紹介

T：トリトルさんの話を聞いておじいさんはすぐに信じたか、迷ったか、どちらかに手をあげて下さい。

A すぐに信じた B 迷った C 最初迷い、やがて納得した(後から出た考え)

殆どの子が「迷った」に手をあげた。そこで教師が

T：「おじいさんは、本当に迷ったのかな。そんなこと何も書かれていないよ」と揺さぶりをかけた。すると、子どもは教材文の「しばらく考えていました」という文章に目を向けて「しばらくの間は迷っていたが、やがて納得した」という考えを新たに出したのである。

T：おじいさんは、自分自身を納得させるためにどんなことを考えたのか

C：何もやらないで死ぬよりは、もう一度転んでみよう。

C：前向きにかけ算方式で行こう。

C：転んだだけ増えるから転ぼう。

C：トリトルの言うとおりかもしれない。もうこの生活は辛い。早く、病気を直したい。

板書からも分かるように心情の変化を良く捉えていて、「どうして、おじいさんが自分の考えを

業に課題はつきものであること」を学ぶことができたようである。

② 授業者の課題を皆で共有する

授業者の感想からも分かるように、「模擬授業を通して何を学んだか」が重要である。今回の授業者は、「行間を読むことが子どもの思考を深め、お互いの読みを交流していく大切な手立てであること」を実感している。授業者の課題の中に授業者の成長を見ることができる。

授業者の課題は、授業者だけのものではなく、ここで学んでいる皆の課題でもあることを確認し、課題解決にむけた話し合いが行われた。今回は、板書計画と発問の関わりが明確になっていたので、板書を通して「授業づくり」の話し合いや振り返りが活発に行われた。板書そのものに授業者の思いや指導力が表れていることを再確認することができた。

③ 授業評価シートを基に話し合い

授業者の課題と同時に生徒役の学生も授業評価シートに授業評価を行っている。

右記の授業評価シートにもあるように、板書に工夫があり、変わる前→きっかけ→変わった後の流れが分かりやすかったと記されている。また、子ども一人一人の考えを上手にまとめて板書していったことや、子どもへの声かけのきめ細かさについて学ぶことが多かったなどの声も数多く上がっていた。

その一方、対比表現をしっかりと押さえることや、その時の気持ちを色で表現させていたが、その時の子どもの発言を板書する必要があるという意見も出ていた。また、行間を読ませた後、「うん、なるほど、なるほど。」にも目を向けさせて、「なるほど」が2回も繰り返されている訳を考えさせることが大切であるということにも触れている。

そうすることで、「おじいさんがふとんからはね起きた」ことや「わざとひっくり返し転んだ」ことに納得がいくのではないかという貴重な意見が出ていた。

その後、今回の模擬授業で学んだことを自分の授業づくりにどのように生かしていくかを「自己評価シート」にまとめていった。

学習指導案・模擬授業評価表		
3 年次 評価者名		
【学習指導案】		
模擬授業者名	教科名	単元名・教材名
佐々田 夏奈	国語	学年ごとの読書とことばの力をつけること 三年次
A・B・C評価: A:最良 B:良好 C:要改善		
学習指導案の基本的作成の観点		評価
1	単元名・単元目標・教材観・指導観・児童生徒観が明記されている。	A
2	単元指導計画の指導内容が時系列で記載されている。	A
3	評価の観点は記載されている。	A
4	学習材や教材教員が記入されている。	A
5	本時の目標、評価が明記されている。	A
本時の指導案の内容から		
6	学習めあてが明記されている。	A
7	学習活動が精選され目標を達成するための山場の活動がわかる。	A
8	教師の主な発問や児童生徒の予想される反応が記されている。	A
9	本時のまとめや振り返りの場が明記されている。	A
10	板書計画が明記されている。	A
合計点		
【学習指導案と本時の授業についてのコメント】		
◎学習指導案についての成果と改善点を書いて下さい		
○時間自己分析もとてもいい感じで、無理なくスムーズに進んでいたなと思います。予想される児童の反応も細かく書かれていて、よかったです！		
◎模擬授業を通しての成果と課題・感想等を書いて下さい。		
○児童に対しての声かけが非常に、明るく授業が展開されて楽しい授業だった。表情や声のトーンを表情やフェーズに分けて使っていたのでとても気づかれています。また、板書の仕方がとてもよかったです。変わる前→きっかけ→変わった後が流れて分かりやすかったです！夏奈さんの授業が伝わってきました！素晴らしい授業とありがとうございました。(^^)!		

④ 自己評価シートから

★ 評価内容や友人から学んだことや心に残った言葉などを気軽な気持ちで記録してください。きっと、教師になった時に役に立つと思います。書くことは考える事です。

今回の模擬授業を通して、教材研究の楽しさと行間を読め取るこの大切さを学びました。今回は教材研究が参加していたため、LTBの7777しながら授業を受けました。一人では考えが深かったのが言葉でも、みんなが進んでいくと新しい気づきがたくさんあったので、学び合いの楽しさを感じました。授業のためには、「見方を変えるだけで良いイメージになる」「前向きが大切」と出していたので、この発言を競い合いによって子ども達に伝えたい。学ばせたいことを教師がしっかりと読み取り、生活の中で活かすことが出来るようになることが大事だと思います。また、今回の授業は変化する前、変化した後の流れが分かったり、その根拠は学びの足跡になるということも学びました。それはやはり授業が楽しいから一生涯教材研究をして、子ども達から学ばせたいことを引き出す授業を作りたいです。

あなたの授業態度を自己評価して下さい。基準は教師になる貴方自身で決めて下さい。
○で囲んで下さい

A B C D E

学ぶとは、自分の考えが変わったり深くなったりして自己変容を遂げることであり、同時に謙虚な気持ちで他人の話を聞いたり、学ぼうとする態度や態度が養われたりすることだと思っています。講義の始めと最後で自分の気持ちに変化がどの程度表れてきたかで自己評価していいと思います。自己評価カードは提出して頂きます。

★ 評価内容や友人から学んだことや心に残った言葉などを気軽な気持ちで記録してください。きっと、教師になった時に役に立つと思います。書くことは考える事です。

「子どもに寄り添い、子どもと授業を創り上げる」とても大事なことだと思いました。教師は常に教師目線だけでなく、子ども目線から見てあげてください。子ども目線になると、常に授業を作る時、それは教師の目線によって教える、メリハリも入らずに感じました。

また、自分の課題がある「考える授業」その根拠も定まってきたので、今後の模擬授業で活かしたいです。

あなたの授業態度を自己評価して下さい。基準は教師になる貴方自身で決めて下さい。
○で囲んで下さい

A B C D E

学ぶとは、自分の考えが変わったり深くなったりして自己変容を遂げることであり、同時に謙虚な気持ちで他人の話を聞いたり、学ぼうとする態度や態度が養われたりすることだと思っています。講義の始めと最後で自分の気持ちに変化がどの程度表れてきたかで自己評価していいと思います。自己評価カードは提出して頂きます。

行間と読む

ここでは、二人の学生の自己評価シートを提示する。Tさんの自己評価シートには、教材研究を仲間と行うことの楽しさ、教師同士が互いに学び合うことの大切さが述べられている。また、Sさんの模擬授業から学んだことも具体的に記されている。このことから、「授業力は、教師同士のチームワークの中で向上することや「授業力が板書に表れる」ことなどを身をもって体験したことになる。このような経験は、近い将来、学校現場で教壇に立った時に、授業に確実に生かされるものだ」と確信している。

Aさんは、常に自己の課題として「思考する授業づくり」を追求し続けていて、その視点で自己評価シートに記している。「子どもに寄り添い、子どもと授業を創り上げる」ために具体的にどうすれば良いかについてしっかり考えながら模擬授業に参加している。

そして、他人の授業から学んだことを自分の授業にどう生かしていくのかについて触れている。教師として「常に学び続ける」姿勢が既に備わっている。教壇に立った時、一時間一時間の授業を大切にしながら授業力向上に日々努めていこう。

このように学生の自己評価シートから学生の可能性の大きさを実感している。

7 学生の授業力向上に向けた支援について

(1) 学生の課題に沿いながら「模擬授業」を進める

模擬授業を通して、「学生にどんな力をつけたら良いだろうか」と考えた時、学生の共通の課題に沿いながら「教材研究から授業実践、リフレクションまでを丁寧に行っていくこと」がきわめて重要となる。このことは当然のことであるが、実際の講義の時間では、学生の模擬授業とリフレクションを行うだけで精一杯である。そこで今回は、オフィスアワーの時間を上手く活用しながら学生の課題に寄り添った指導等を行ってきた。

学生が授業力をつけるためには、模擬授業を数多く行ったり他人の授業を参観したりすることも

大切であるが、それだけでは物足りないことを学生自身がよく知っている。「授業の本質」に迫ったり、「共通の課題解決に積極的に挑んだり」するためには、授業づくりの一連の流れの中で教員と学生が共に学び合いながら授業を創っていかねばならない。

教員の授業力は、学生に大きく影響していくので「教師としての姿勢や真摯に授業に向き合う姿勢」を見せていくことも重要であり、教員自身の授業力向上への努力が欠かせない。

学生自身が近い将来、学校現場に出た時に、実践力のある教師としての力を発揮したり、授業づくりを自分自身の課題として追求し続ける姿勢を持ち続けたりするためには、学生の頃から身に付けて置かなければならないことがあることにも気づかせていく必要がある。

そのためにも、学生の生の声に耳を傾け、学生の課題に沿った授業づくりを今後も継続していくことが重要で、それが学生の授業力の向上に繋がることを確信することができた。

(2) 学校現場の校内研究等とリンクした模擬授業と模擬授業だよりの発行

今回の模擬授業の特徴は、普天間第二小の校内研究授業に学び、その良さを学生自身が自分の模擬授業に生かしていることにある。学生が学校現場に出向き、校内研究授業を観察したり授業研究会に参加したりすることには、授業に関することだけでなく学級経営の仕方等にも目を向けるなど予想以上の学びをしている。

これまで記述してきたように、学校現場で学んだことを基に仲間同士で教材研究の仕方を学び、それを指導案づくりに繋げて模擬授業を実施している。リフレクションでさらに話し合い、自分の学んだことを自己評価シートにまとめている。とても有意義な取組になった。

① 「三年とうげ」の授業を二度学ぶ

次の週の模擬授業の時間で「模擬授業だよりの」を通して、授業の成果と課題を確認するようにしている。

右記の「模擬授業だよりの」（筆者作成）は、Nさんの「3年とうげ」の授業を記述している。「教材研究の段階で特に力を入れたことが実際の授業にどう生かされたのか」「それは、板書にどのように表れているのか」「中心発問やゆさぶりの発問は適切であったか」「リフレクションで出たことで大切な学びはなんだったのか」などを含めて、簡潔に記載するように心がけている。

このように、「模擬授業だよりの」は、大事なことを確認すると同時に、今回の課題を次の授業者へ繋げる大切な役目も果たしている。

また、学生が学校現場に出て「授業づくり」で少し困った時に振り返ることができるように作成には、気を配っている。

② 福井県の名人の授業に学んで

ここでもうひとつ福井県の名人の授業を基に教材研究を行い、模擬授業に繋がった事例を「模擬授業だよりの」で紹介したい。

この模擬授業は、4年生の「算数科において

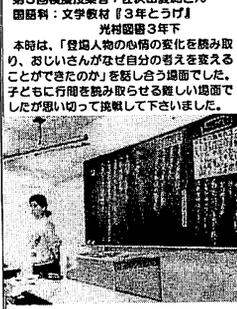
模擬授業だよりの

第 8 号

平成26年後期
平成26年12月10日
担当：玉...城、み、子

第3回模擬授業者：佐次田夏紀さん
副題科：文学教材『3年とうげ』
光村図書3年下

本時は、「登場人物の心情の変化を掴み取り、おじいさんがなぜ自分の考えを変えることができたのか」を話し合う場面でした。子どもに行間を読み取る難しい場面でしたが思い切って挑戦して下さいました。



「たった45分しか与えられていない模擬授業で、しかも単元の最も重要な場面をヤマに据えてくるといふ教師の力が試される授業を見事にクリアできました。この経験はきっと今後の授業づくりにおいて大きな自信に繋がると思っています。夏紀さんに拍手を送りたいと思います。互いに学んだことを共有したいと思います。」

「板書を見れば、教師の採り手が分かると思われています。板書は授業の足跡であると同時に教師と子どもが創り出した本時の授業の履歴なのです。ところで物語が変化する時には必ずきっかけがあります。そのきっかけを明確にしてその前後のおじいさんの様子や表情を基に読み取らせています。キーセンテンスの「おじいさんは、しばらく考えていました。うなずきました」と「うん、なるほど、なるほど。」の間をあげて行間を読み取る工夫をしています。この板書は子どもの思考に寄り添った良い板書だと思いました。とても分かりやすいですね。ここでは、リフレクションにもあったように「対比表現」をしっかり押さえることが大切です。それから、その時の気持ちを色で表していました。ブルーイメージと明るいイメージなども板書すると、子どもから「不安・心配」が「うれし、楽しいイメージ」に変化したことの気づきがでてくると思っています。その気づきを色チャートで板書したいですね。

「大きく見せる授業で大切に「教師が気づかせる場面」を工夫が大切だ」ということを、教師が「おじいさんは、トリトルの話を聞いてすぐに思いました。それとも違ったか」を出さずして子どもに「しばらく考えて」の経過を基に、少し違ったがやがて思えるようになったと思いを述べています。そこで、教師が「おじいさんが深いながらも自分を納得させるためにどんなことを考えたか」の発問で子どもが納得する考えをどんどん出してきました。ここで教師は満足することなく、さらに「うん、なるほど、なるほど。」となぜ2回も繰り返したのかを考えさせます。そうすることで、おじいさんの納得の強さを確認できますね。おじいさんは、自分自身に強い思い寄せたからこそ、「布団からはね起きたい」の繰り返しができたことを読み手である子ども自身が強く納得することができると思います。」

8 成果と課題

(1) 成果について

① 「学生の授業づくりにおける課題は何か」をしっかり把握し、その課題に沿いながら授業づくりを行うことによって、学生自身が主体的に模擬授業づくりに取り組み、自己の課題解決に意欲的に挑むことができています。特に「教材研究の仕方」を身に付けるようになってから、教材を観る視点が明確になり「子ども主体の授業づくり」のために、教師がどんな手立てや発問を考えたら良いかを具体的に考えている。

② 学校現場に向き、校内研究会の授業や授業研究会への参加が増えるにつれて、授業を観察する視点にも変化がでてきた。良い授業等に触れることにより、学生の授業づくりに対する意欲が高まり、実際の模擬授業においても学校現場で見た子ども達のことをイメージしながら子どもの思いや考え、呟きを拾うことができるようになってきている。授業力に明らかな変容が見える。

③ NARAEネットの関連で指導主事との連携を図りながら実際に模擬授業に関わって頂くことにより、各教科における専門性の重要さに気づくようになってきている。

また、沖縄県や那覇市等の学校現場の授業づくりの現状についても詳しく知る機会になっていて、各自が「今後、学生時代に力を入れていくことは何か」等を明らかにすることができている。

④ 4年次、3年次、2年次が一堂に会し、ひとつの授業について「子ども主体の授業づくり」や「授業のヤマ場」について話し合い、学び合うことで、発言の内容に深まりと広がり、そして具体性が出てきています。お互いに切磋琢磨しながら授業づくりを行うことに喜びや楽しみを感じるようになってきている。

(2) 課題について

① 模擬授業を行うにあたって、目の前に実際に子どもがいないので、子どもの実態に即さない抽象的な発問にも学生が上手く応

えてしまうことが時に見られる。授業者の臨機応変な対応や、新たな発問を生み出すためにも、「子ども理解について」もっと深めていきたい。

② 模擬授業において、15回の授業の中で一人1回の模擬授業の実施となっている。そのため、授業内容が導入であったり小単元になったりすることが度々ある。単元全体を通して「授業のヤマ場」となる第2次や第3次を模擬授業に位置づけることが望ましいので、単元全体を見通した授業づくりを行うための工夫に取り組んでいく必要がある。

③ 各単元の教材や備品が揃っているわけではないので1時間の授業づくりのために教材研究以外の教材教具づくり等に時間がかかることが多い。学生は手作りで頑張っているが、教育実践総合センターの方で基本的な教材教具を揃える必要がある。

④ 学校現場の校内研究授業へ参加することは有意義であるが、学生自身のスケジュールの関係で、全員が参加できない状況にある。現在は、都合のつく学生のみに参加になっているが、できるだけ多くの校内研究会を紹介し、多くの学生が参加できるようにしていきたい。また、地域と連携して取り組んでいる授業づくりにも参加してもらい、教師のコーディネーターとしての役割についても学んで欲しいと思っている。

9 終わりに

学生の「模擬授業」は、現在も継続中であるが、回を重ねるごとに学生の「模擬授業」により良い変化がでてきている。これは、一人一人が「自分の授業づくりの課題な何か」を明確にし、課題解決に向けた具体的な手立てをもとに授業実践を行い、リフレクションで主体的に学んでいるからである。この積み重ねの中で、学生同士の学びに深まりと広がりがでてきている。

このように成果と課題を共有しながら、一つ一つの課題を丁寧に解決し、それをお互いの学びの財産として蓄積していくことの大切さを学

生自身が感じていることを頼もしく思っている。

今後、「模擬授業」を通して、学生の授業力の向上をさらに支援していくためにも今回取り上げた4つの課題解決に向けて早速取り組む必要があると考えている。特に、「模擬授業を行う上での環境作り」等は、急務だと捉えている。

学生との教材研究の時間を確保するためのオフィスアワーの時間の有効な活用や、模擬授業を行う上での基本的な教材教具を揃え、備品室を確保する等は、早めに解決していく必要がある。

また、学校現場や指導主事との連携が学生の授業づくりに大きな効果を上げていることから、それを継続して行うために「成果と課題」をしっかりと伝えながら信頼関係を深めていく必要があると考えている。

さらに、これまでの「模擬授業」での学びの蓄積を目に見える形にして、これから受講する学生に伝えていくことが重要である。

蓄積の第一歩として本稿では、第3回目の「模擬授業」を取り上げ、教材研究の仕方や「ヤマ場」の設定の仕方、子どもの思考を深めるための取り組みについて記してきた。

第1回目の課題から現在までの模擬授業の学びの積み重ねは、学生一人一人の教材研究ノートに丁寧に記されている。この教材研究ノートは学生個人のものであるが、お互いに共有できる方法を模索していきたいと思う。

本稿を書くに当たっても、後期「模擬授業」の受講生10名の教材研究の足跡や授業中の板書や実践のワークシート、授業後の自己評価シートや授業評価シートなどが省察を行う上で欠かせない資料となった。全面的に協力してくれた学生一人一人のお陰で本稿が出来上がったと言っても過言ではない。

今回「3年とうげ」の模擬授業を積極的に行った佐次田夏紀さん（実践学3年次）、教材研究等に最初から最後まで参加し、授業者に支援を送った友利理乃さん（実践学3年次）新川颯人さん（実践学3年次）をはじめ、受講生全員に感謝を申し上げたい。

今回の実践事例をスタートとして、学生の授

業力向上に向けた実践的な取組を積み重ね、常により良い授業づくりに向けて追究し続ける学生を育てていきたいと思う。学校現場で実践力のある教師として活躍できるように学生の可能性を大切にしていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省：「小学校学習指導要領」2008
- 2) 宮地 裕他41名著：「国語 3年下 あおぞら」光村図書出版株式会社
- 3) 吉本 均責任編集：「現代授業研究大事典」明治図書 1987年
- 4) 水戸部修治記念講演資料：「第53回全国国語科教育研究大会 東京大会 育成すべき資質・能力を見据えた国語科の授業づくり」2014年 12月5日
- 5) 宜野湾市立普天間第2小学校校内研究会 第3学年指導案 2014年 11月